

二〇二〇年度 群馬大学共同教育学部 推薦入試問題  
国語専攻

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は表紙を含め二枚、解答用紙は一枚、下書用紙は一枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
3. 受験番号と氏名は全ての解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題用紙と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい（なお、出題の都合により、一部省略した）。

「授業で先生が答えのない問いをぶつけてくるのは時間の無駄だ、と書かれた（学生の）コメントをもらったけど、困ったものですね」という話を複数の先生から聞いたことがあります。これは、大学の授業を「教師から知識を教わるもの」と思い込んでいる学生が多いということだと思いますが、さらに言えば、自分で問題を発見し、それを自身で解決する（しようとする）意志や力を持っていない学生が少なくないということなのかもしれません。

日本語学の授業、とくに語彙論・意味論の授業でしばしば見られるのが、「正しい日本語」を身につけるのが授業の目的だと思い込んでいる学生です。このような強い規範意識を持つ学生は、ほとんどの場合、「答え」だけに目がいき、「なぜ」「だれが」「どのようにして」には興味がありません。また、これは母語話者にありがちなことですが、ある言語現象に対して「当たり前」と考えてしまい、それ以上の問題意識を持たない学生も少なくありません。筆者の授業の受講生には日本語教師や国語教師を志望する学生も多いのですが、仮にこうした意識のまま教師になった場合、現場で学習者の疑問にうまく答えられず、「そのまま覚えて」といった指導をすることにもなりかねません。

では、学習者（母語話者・非母語話者を問わず）の疑問に的確に答えられるようになるためには、どうすればよいのでしょうか。（後略）

（「語彙の体系性・多様性を意識し、相対化する」金愛蘭、『日本語学の教え方 教育の意義と実践』福島健伸・小西いずみ編著、二〇一六年、くろしお出版、五五―五六頁）

問 将来、国語教師になったとき「そのまま覚えて」といった指導をしないために、大学の日本語に関する授業で、（イ）どのようなことを（ロ）どのように学ぶ必要があるか、あなたの考えを述べなさい。（六〇〇字以内）